

今でも、女性は大陽だった。

あんたら男にや任せておけぬ。私が変えますこの町を！

女たちの都

～ワッゲンオッゲン～

大竹しのぶ

松田美由紀 杉田かおる 西尾まり

ブラザートム 遠藤憲一 中村有志

長山藍子

監督：禰映 プロデューサー：小泉朋

企画：福田智穂 脚本：南えると・禰映

音楽：渡邊崇 撮影：葛西善仁 照明：蔭苗友一郎 録音：山田幸治
美術：津留啓亮 編集：小堀由起子 助監督：高明 制作担当：篠宮隆浩
衣装：星野和美 メイク：及川奈緒美 プロデューサー補：福岡美穂

エンディングテーマ：MICA「虹の花」

協力：天草フィルム・コミッション、STORIES

企画・製作：テトラカンパニー

製作：あまくさ映画製作支援の会

配給：株式会社映画24区、アルゴ・ピクチャーズ 宣伝：アルゴ・ピクチャーズ

協賛：天草宝島観光協会 DUSKIN. 天草信用金庫

天草ケーブルネットワーク株式会社 HERO'S海

助成：文化芸術振興費補助金

2012年/日本/103分/DCP/ビスタ

©2012「ワッゲンオッゲン」製作委員会

www.jaijai-movie.com

芸者で町おこし!? 女たちの夢と情熱の物語



「男なんてそがんもんよ 原動力は女と金」

女たちの大きな愛がふたたび町と人生を輝かせる！

熊本県天草市牛深。100年前、豊富な漁獲量を誇るこの海の町には、若く屈強な男たちが稼ぎ、金が舞い、いい女が春を売り、豪華絢爛な花街が栄えた。しかし今では・・・魚は捕れない、働く場はない、若者はいない、日本一の衰退都市、つまるところお先真っ暗。現状を変えようにも、口だけ達者で呑んでばかりの旦那衆。

それなら女がやるまでだ。愛する町の活性化のためウツボ屋の女房・弓枝と仲間がもくろんだのは「花街復活」。

元遊郭を料亭に？主婦が芸者に？！女が「女」で町おこし。まさにここが「女たちの都」！

愛情と気力あふれる女たちが織りなすユーモラスな社会派人情劇。年齢関係なく未来を切り開いて行こうと突き進む彼女たちの姿を見れば、貴女にも同じく夢を叶える力が眠っていることに気付くだろう。



大女優たちの豪華共演！

主人公・弓枝を演じるのは大竹しのぶ。故新藤兼人監督のミューズとして晩年の名作を支えた大女優が、本作でも躍動する。弓枝とともに難題を突破していく仲間・ゆり子に松田美由紀（「犯人に告ぐ」）、不妊と姑に悩む俊恵に西尾まり（「酔いがさめたら、うちに帰ろう」）、離婚を機に故郷へ帰ってくる春美に杉田かおる（「青春の門 自立編」）といった迫力の実力派女優が勢揃い。息子夫婦にやきもきする姑に長山藍子（「男はつらいよ 望郷篇」）が特別出演している。ブラザートム、遠藤憲一、中村有志がそろいもそろった愛すべきダメ男を軽やかに演じているのも楽しい。監督は、プロデューサーとして「パッチギ！ LOVE&PEACE」「フラガール」など良質の日本映画を手がけて来た禰映。

衰退都市 No.1 の街から生まれた【女性讃歌】

過疎化、高齢化、少子化、経済の状態の悪化から衰退都市日本一とささやかれる天草市。しかしそれは天草だけの問題ではない。今や東京以外の都市はどれも同じ状況を抱えている。経済成長の反面、見捨てられてきた「田舎」を見直そうという動きが近年活発化。その都市の持つ特色を活かした活性化計画が日本各地で行われている。



【STORY】ウツボ屋の女房・弓枝、スナックのママ・ゆり子、漁師の嫁・俊恵は天草で暮らす女友達。財政も活気も先細っていく町をなんとか活性化させたいと思っているが、男は働かず酔っぱらってばかりで九州男児のプライドだけは高い。業を煮やした弓枝たちが思いついたのは、築100年の元遊郭「三浦屋」を使って料亭再開、花街復活。これが女の町おこし！離婚を機に東京から戻って来た春美も加わり、女にしかできないアイデアと行動力勝負の「町再建計画」が始まる・・・



出演：大竹しのぶ 松田美由紀 杉田かおる 西尾まり ブラザートム 遠藤憲一 中村有志 長山藍子 ほか
監督：禰映 プロデューサー：小泉朋 企画：福田智穂 脚本：南えると、禰映 エンディングテーマ：MICA「虹の花」 協力：天草フィルム・コミッション、STORIES 企画・製作：テトラカンパニー 製作：あまくさ映画製作支援の会
配給：株式会社映画24区、アルゴ・ピクチャーズ 宣伝：アルゴ・ピクチャーズ 協賛：天草宝島観光協会/ダスキン/天草信用金庫/天草ケーブルネットワーク/HERO海 助成：委文化芸術振興費補助金 ©2012「ワッゲン・ワッゲン」製作委員会
012年/日本/103分/DCP/ビスタ www.jaijai-movie.com

11/9(土)公開

入替制・途中入場はご遠慮願います
自由席・整理券呈示に入場していただきます

先着限定で、くまもんの
名刺が缶バッジが付いてます！

劇場窓口にて前売鑑賞券

¥1,300 発売中！ (11/9 までの販売)

梅田スカイビル(空中庭園)4F
梅田ガーデンシネマ
06-6440-5977
www.gardencinema.jp/umeda/

水曜日は
¥1,000均一
(男女とも)

Introduction

解説

「男なんかそがんもんよ、
原動力はオンナと金！」
女たちの大きな愛が
ふたたび町と人生を輝かせる！

熊本県天草市牛深。100年前、豊富な漁獲量を誇るこの海の町には、若く屈強な男たちが稼ぎ、金が舞い、いい女が春を売り、豪華絢爛な花街が栄えた。しかし今では……魚は獲れない、働く場はない、若者はいない、日本一の衰退都市、つまるところお先真っ暗。現状を変えようにも、口だけ達者で呑んでばかりの旦那衆。それなら女がやるまでだ。愛する町の活性化のためウツボ屋の女房・弓枝と仲間がもくろんだのは「花街復活」。元遊郭を料亭に？主婦が芸者に？女が「女」で町おこし。まさに「こが」「女たちの都」！

愛情と気力あふれる女たちが織りなすユーモラスな社会派人情劇。年齢関係なく未来を切り開いて行こうと突き進む彼女たちの姿を見れば、あなたにも同じく夢を叶える力が眠っていることに気付くだろう。

大女優たちの豪華共演！

主人公・弓枝を演じるのは大竹しのぶ。故新藤兼人監督のミュージズとして晩年の名作を支えた大女優が、本作でもミュージズとして躍動する。弓枝とともに難題を突破していく仲間・ゆり子に松田美由紀（「犯人に告

ぐ）、不妊と姑に悩む俊恵に西尾まり（「酔いがさめたら、うちに帰ろう。」）、離婚を機に故郷へ帰ってくる春美に杉田かおる（「青春の門 自立篇」といった迫力の実力派女優が勢ぞろい。息子夫婦にやきもきする姑に長山藍子（「男はつらいよ 望郷篇」）が特別出演している。ブラザートム、遠藤憲一、中村有志がそろいもそろった愛すべきダメ男を軽やかに演じているのも楽しい。監督は、プロデューサーとして『パッチギ！ LOVE&PEACE』『フラガール』など良質の日本映画を手がけてきた禰映。

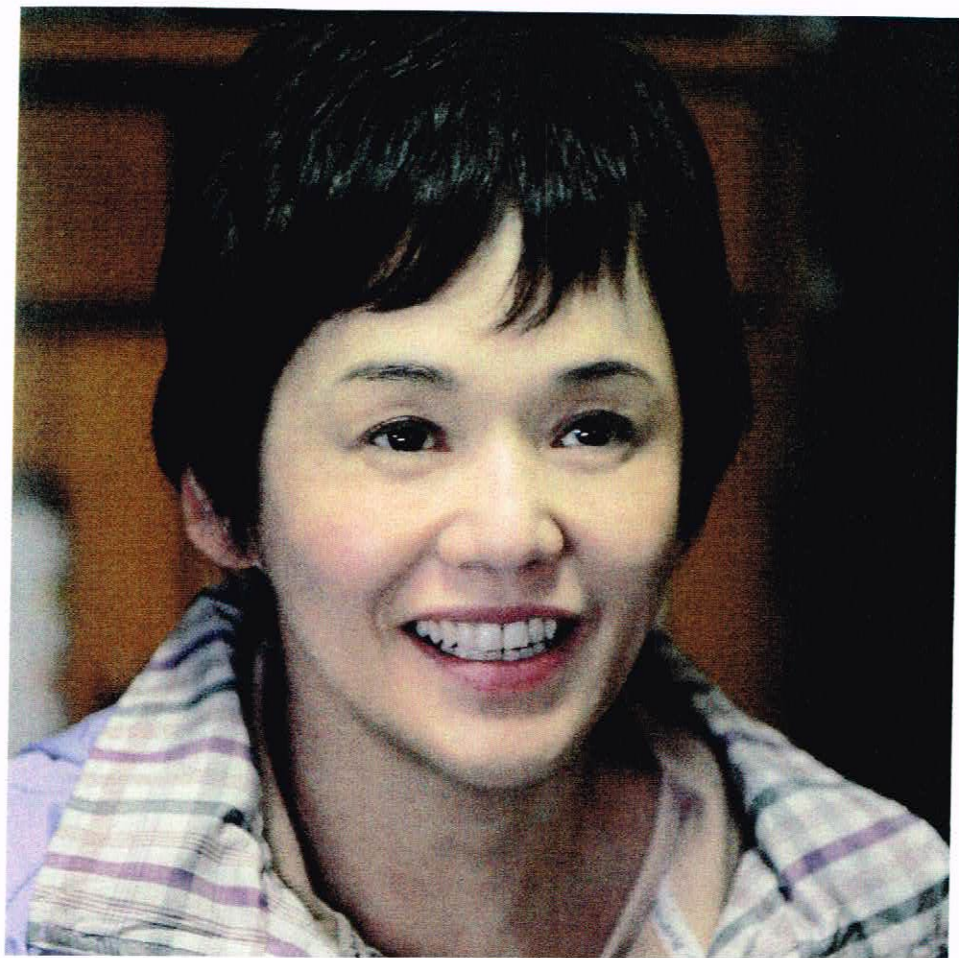
衰退都市ナンバーワンの 街から生まれた「女性讃歌」

過疎化、高齢化、少子化、経済の状況の悪化から衰退都市日本一とささやかれる天草市牛深。しかしそれは天草だけの問題ではない。今や東京以外の都市はどこも同じ状況を抱えている。経済成長の反面、見捨てられてきた「田舎」を見直そうという動きが近年活発化。その都市の持つ特色を活かした活性化計画が日本各地で行われている。



羽山弓枝

大竹しのぶ



✧ Shinobu Otake

1957年東京都出身。75年、映画『青春の門〜筑豊篇』（東宝）ヒロイン役でデビュー。その鮮烈さは天性の演技力と絶賛される。以降、気鋭の映画監督、舞台演出家の作品には欠かせない女優として圧倒的な存在感は常に注目を集め、映画、舞台、TVドラマ、音楽などジャンルにとらわれず才能を発揮し、話題作に相次いで出演。作品ごとに未知を楽しむ豊かな表現力は、主要な演劇賞を数々受賞して評価されるとともに、世代を超えて支持され続けている名実ともに日本を代表する女優。近年の主な出演作に、舞台「女教師は二度抱かれた」「暁の母」(08)、「ザ・ダイバー」(09)、「ヘンリー六世」(10)、「身毒丸」「ピアフ」(11)、「シンペリン」(12)、映画「オカンの嫁入り」(呉美保監督／10)、「一枚のハガキ」(新藤兼人監督／11)、TVドラマ「それでも、生きていく」(CX・11) などがある。

——まずは、この映画に参加しようと思った理由を教えてください。

大竹 吉田康弘監督の『キトキト!』に出演した時、プロデューサーだった禰さんに「今度、僕が監督するので出てください」と言われて、「通行人役でも協力しますよ」と口約束していたんです。そうしたら「大竹さん主役で」という話になって、「えー!! じゃあホンが出来たら見せてください」と。そこからスタートして、実現までは長い道のりでした。

——脚本を読んだ時の印象は?

大竹 最初に読んだ脚本には、正直

に言うと、いろいろ疑問に思う点がありました。

決するはずなと思ったり、劇中の夫婦や家族のあり方に一部納得できなかったりしたので、監督に一つひとつ聞きました。特に俊恵が妊娠したふりをして、不妊の原因をひとりで抱えるところは、女として理解しづらかったです。監督とは撮影が始まってからもディスカッションを続けていました。脚本を細かい部分まで練り直し、また私も牛深の地域性に触れるうちに、すべてではないですが、理解できるようになりました。

——牛深の印象はいかがでしたか?

大竹 着いてすぐにシャッターが閉

じた商店街を見た時は、「どうすればここを活性化できるんだろう」と思いましたね。滞在するうちに、人を愛する町なんだという印象を受けましたね。男性も女性も人なつっこくて親切。人と人のつながりが密で、お互いに何かあるとすぐわかってしまうような関係の中で、皆さん支え合って暮らしているように見えました。

——弓枝という女性については、どのように解釈しましたか？

大竹 毎日幸せに生きようとしている純粋な女性だと思いました。明るくカラカラカラと笑っている女性にしたいなと思いつながら演じました。私が出会った牛深の女の人たちのイメージそのものですね。強くて、明るくて、楽しいことが好きで、いつも感謝して笑っている感じ。そして自分の町を本当に愛していて、地元を元気にしたいという気持ちが強い。やはり町を愛する心なくして、町の活性化は不可能ですから。

——そんな役を表現する上で、特に力を注いだシーンはありますか？

大竹 やはりラストのハイヤの踊りですね。みんなで楽しくチャージングに踊れたらいいなと思いました。ハイヤの先生や牛深ハイヤ保存会の方たちが、熱意を持って本当に一生懸命に教えてくださったので、映画のハイヤは絶対に魅力的に見せなくてはという気持ちもありました。上手に踊れなくてもハイヤの精神みたいなものは表現したかった。撮影当日は大勢のエキストラの方に集まっていたかったです。雪の降る中、長時間にわたる撮影は大変だったと思います。

大竹 毎日の食事から、裏側の見えない部分まで、何から何までお世話になりました。出演者みなで感謝の意を表したいと思って、ホテルの宴会場でパーティーを催しました。地元の皆さんと一緒に歌ったり踊ったり、こんなふうに大々的にやったのは初めてでしたが、とにかくこの映画に協力してくださった皆さんに「ありがとう」が言いたくて。とても楽しい素敵な思い出です。

——この映画における女性の力とは、どういうものだと思いますか？

大竹 この映画を通して、女性が女性であること、つまり夫を支え、子供を育てるということに誇りを持つて生きている牛深の女性にたくさん出会いました。そして今の時代、女の人も仕事を持って強くなったと言

われているけれど、子供が育つ町、夫が働く町がもつと豊かになるように女の立場で頑張る人には、また別の強さがあると思いましたね。

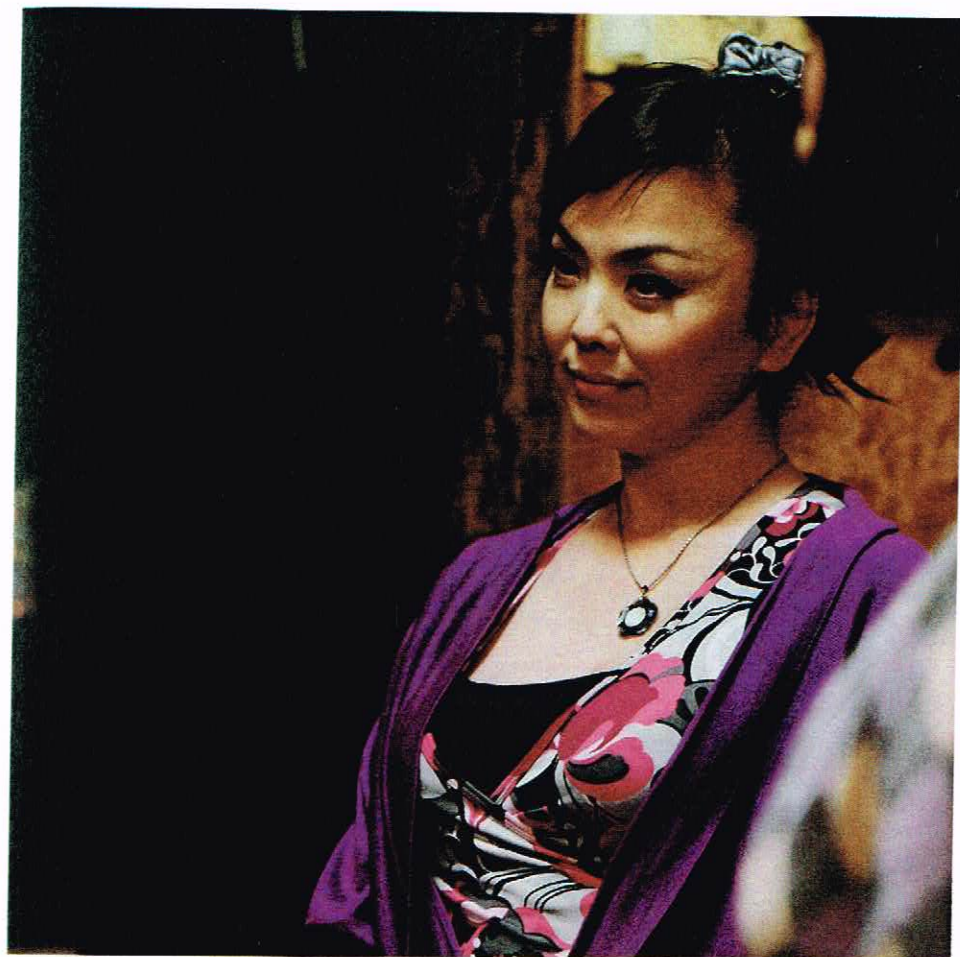
本当に牛深って、そういうおかあちゃんたちの力で回っている場所だと思うんです。おとうちゃんたちは「お魚が獲れたらそれでいいじゃん」という感じであまり動かず、女性の強さを楽しんでいる。撮影中も、劇中の男3人組みたいな男性たちをあちこちで見かけましたが、みんな幸せそうでした。思わず「もつと頑張れ」「働け」と言いたくなりましたけど（笑）、こういう風景の中で、日本の漁業や農業や畜産業は栄えてきたんだろうし、こういう場所が寂れていくのは絶対によくないことだと思います。

もちろん今のままでは若者が離れていくから、難しい問題です。映画の中でも答は出ていません。でも映画によって全国に牛深の魅力が伝わることで、町の活性化が少しでも盛り上がるいいなあと思います。

「牛深の女性たちの強さと

町を愛する心をハイヤで

表現したいと思いました」



松田美由紀

大脇ゆり子



❖ Miyuki Matsuda

1961年東京都出身。79年『金田一耕助の冒険』（大林宣彦監督）でスクリーンデビュー。演技の幅広い個性派女優であるとともに、近年は女優としての活動にとどまらず、書籍のアートディレクションなど制作活動も意欲的に行っている。また、写真家としての評価も高く、写真展の開催や雑誌での連載など、表現活動は多岐にわたる。主な出演作品は、映画『エレファントソング』（利重剛監督／94）、『のど自慢』（井筒和幸監督／99）、『犯人に告ぐ』（瀧本智行監督／07）、『MADE IN JAPAN -こらっ!-』（高橋伴明監督／11）、TV「新・天までとどけ」シリーズ、「私立探偵 濱マイク」(07)、「湯けむりスナイパー」(09)、舞台「三文オペラ」(宮本亜門演出／09)など。

— この映画に参加しようと思った理由を教えてください。

松田 コメデイとして面白いなと思いました。こういう大人が主人公のコメデイが今は少ないですね。

— 姉さん役についてはどう思われましたか？

松田 最初に読んだ脚本では姉さんの背景が何も書かれていなかったのでもっと詳しく知りたいと監督にお伝えしました。彼女には町を出て行った恋人がいて、彼はもうすぐ帰ってくるという設定は後から追加されたものなんです。

姉さんを演じるにあたっては、地

元のおばちゃんぽく見えるといいな

と思いましたね。想像ですけど、水

商売の人って、その土地のあたたか

さや寂しさを象徴する存在だと思っ

んです。毎日、地元の男の人たちと

接しているバーのママは、ある意

味、その土地の女の代表ともいえる

存在のようなね。私は父が九州出身

で、九州の女性の感じはよくわかる

ので、演じやすかったです。九州の

ママは気風が良くて、明るくて、怒

る時はすごく怒るけれど愛情深いん

だらうなと想像しました。

— 実際に牛深に滞在してどんな印象を持ちましたか？

田 想像していた以上にラテンな

感じでした(笑)。皆さんとても元気で、チャキチャキしていて、エネルギーグシユ。映画の撮影隊が来るのが何十年振りということもあって、町全体がものすごく盛り上がりつついたのですが、中でも支援の会の女性たちが本当に楽しんで映画に参加しているのが伝わってきました。関わり方が積極的に前向きなんです。ハイヤ踊りの先生も、通っていたマッサージの女性も、ごはんを作ってくださるボランティアスタッフも、とにかく会う人会う人が、みんな明るくて元気。

ごはんといえば、予算が少ない中、毎回工夫して作ってくださるのが本当にありがたかったです。すべてがおいしくて、しのぶちゃんとの挨拶が「太った?」になりました。二人で顔を合わせるたびに「元気?」「おはよう」じゃなくて「太った?」と言いついていました(笑)。役柄的にも太ってよかったんですけど。実際、太り過ぎました。(笑)

——姉さんのキャラクター以外にも、牛深に滞在する中で膨らませていった部分はありますか?

松田 役者陣全員、この映画を町の

人たちに喜んでもらいたいという気持ちで日に日に強くなって、牛深のいいところをよりたくさん映画に取り入れたくなりました。それで役の描き方だけでなく撮影場所についてもこつちのほうがいいんじゃないかと、監督に提案していました。現場で変更になることもあったので、スタッフは本当に大変だったと思います。でもキャリアが長くなると、ただ役を演じるというより一緒に作る感覚になってくるんですよ。

——松田さんにとって、女性の強さとはなんでしょう?

松田 女性は愛を作る人たちだと私は思っているんですね。男の人が社会を構築する存在だとしたら、女性は愛を構築する存在。子供を生み育て、おいしい食事を作り、内側から愛を作っていく。そしてそれがすべての源になっている。そういう意味

「女が強い社会は平和。」

男が強いと戦争になる。

女性が元気なのはいいことです」

で、女性が強い国は平和です。男性が強いと戦争が起きたりする。女性が元気であることは、社会にとってすごくいいことだと思いますね。

——平和といえば、松田さんは女優業はもちろん、写真家やプロデューサーとしての活動の他に、様々な社会問題にも取り組んでいらつしやいますね。

松田 私たちのような、芸能関係の仕事、映画や舞台を作る仕事って、人を喜ばせる仕事だと思うのですが、その先に平和があることはすごく大事だと思っています。芸能人が平和活動をするのは、欧米では当たり前のことなんです。日本はまだ遅れていきますね。一般の人たちも、普通に平和活動を趣味の一つでもいいから、少しずつ平和に対する意識が根づい

ていつてほしいですね。

——地域を元気にする取り組みについてはどうお考えですか?

松田 地方発の映画が最近増えていくけれど、それを紹介する場ももっと増えるといいですね。全国各地の映画を物産展みたいなかたちで集めても面白そう。

人でも映画でもなんでも東京に集中するのではなくて、日本がもっと地方分散型になればいいのと思います。その一環として、里親制度が地方に根づくといいですね。今回、牛深でも感じましたけど、地方には元気なおじいさんおばあさんがいっぱいいて、子供がのびのび育つ環境が揃っているわけですから。地域活性化って、そこが子供にとっての故郷になることですよ。



杉田かおる

河瀬春美



——脚本の完成前からこの作品に参加されていたのですが、春美役のどんな部分に惹かれましたか？

杉田 この映画のお話をいただいたのが、ちょうど私が母親を連れて九州の故郷に戻っていた時期でした。田舎で暮らしながら、都会にはないもの、たとえば自然や、その自然の一部である人間のふれあいの大切さを実感していた時だったので、田舎で人生をリフレッシュさせたいと思っていた春美の役は、とても自分にフィットしましたね。お料理や食べることが好きな設定も、九州の食材について取材していた私自身に重

✧ Kaoru Sugita

1964年東京都出身。72年「パパと呼ばないで」、79年スタートした「3年B組金八先生」で天才子役と呼ばれ、「池中玄太 80キロ」シリーズ（80-92）など、主にTVドラマを中心に高い評価を得る。また、バラエティでも奔放なキャラクターが愛されている。近年では自然農法に興味を抱き、オーガニックに関する書籍も出版している。主な映画出演作に『青春の門 自立篇』（蔵原惟繕監督／82）『男はつらいよ 口笛を吹く寅次郎』（山田洋次監督／83）『大奥』（林徹監督／06）『クロサギ』（石井康春監督／08）など。

なる部分がありました。春美役だけでなく、映画自体、ローカルを見直す今の時代にふさわしいものになる予感がありました。

——脚本完成までも、撮影中も監督と何度も話し合われたと聞きました。杉田さんが特にこだわったのは、どんなところですか？

杉田 主に三浦屋の復活をどう見せるかですね。三浦屋は函館の五稜郭とまではいかなくても、長い歴史の中で各界の著名人が訪れて重要な会合を持ったといわれる場所。遊廓イコール女性を売る場所ではなく、社交場としてのイメージを表現できた

らしいなと思いました。そしてその三浦屋を、今でも旦那さんが通帳管理する家庭が多い地域で女性が経営することの意味を伝えられたらと思いました。

——現場に入って、牛深の人たちにはどんな印象を持ちましたか？

杉田 昔から島外との交流がさかな土地だからでしょうか、とてもおおらかで、明るくて、外から来た私たちを受け入れてくださるんです。

2月の雪降る中での撮影は大変でしたが、地元的女性たちのはじけるような明るさとあたたかさのおかげで乗り切れました。皆さんのホッとする笑顔に何度も元気をいただきました。皆さん、健気でかわいらしいんですよ。都会で生きていると、かわいらしさを求められる機会があまり

ないから、つい笑顔も少なくなってしまうがち。でも女性はいくつになってもかわいらしさが大事なんだなと思いましたね。

——そのかわいらしさは映画の登場人物たちに投影されています。

杉田 はい。私もそこがとても気に入っています。女性がメインの作品という点、私が出演している『大奥』もそうですが、女性の怖さを描いたものが多いですね。

——この映画における女性の力についてはどう思われますか？

杉田 子供を生み育てる女性は持久力、持続力が男性よりも強いのかかなと思います。私には子供がいませんが、今回、共演の女優さんや地元的女性たちのこの映画に対する粘り強さを見ていて、十月十日身籠って、

自立するまで育て上げる女性ならではの気がしました。決してあきらめないで情熱を注ぎ続ける底力といますか。

——その女優陣との共演はいかがでしたか？

杉田 女優さんばかりなので大変緊張しましたけれど、うまくやろうと気負っても失敗するので、なりゆきに身をまかせていました。普段、テレビなどで演技経験の少ない方と共演する時は私が無理にリードするところがあるのですが、今回はそんな必要は一切なく、本来の俳優業の楽しさを思い起こされましたね。

——昭一役の中村有志さんとの掛け合いもチャヤミングでした。

杉田 中村さんはバントマイマーとして素晴らしい方で、昔からファンだったんです。よく舞台を観に行っていますし、サインをお願いしたこともあります。今回共演できて本当に光栄でした。つい首から上だけで演じてしまう私自身の壁を破る上でも、言葉ではなく全身で表現する中

村さんとの共演は、発見することが多かったです。

——杉田さんは女優業の他に、近年はオーガニックな生活にまつわる情報発信や地域に根差した活動にも取り組んでいらつしやいますが、町を活気づける上で大切なこととは何だと思われますか？

杉田 福岡で自然農（耕さず、肥料や農薬も使わず、虫や草との共存共栄を目指す農法）を始めたことがきっかけで、昨年から佐賀県武雄市の食育アドバイザーをさせていただいています。自然農を取り入れたコミュニティガーデン（市民農園）を作って、みんなで野菜を育てたり自然について学んだりして盛り上がりつつあります。人の気と書いて人気と読みますが、やはり人が集まって交わる場所から何かが生まれるのだと実感しますね。そのためには行政と民間が協力し合うことも重要だし、大人が前向きに続ける姿勢を若い世代に見せ続けることが大事なのではないでしょうか。

「町おこしの舞台になるのは

人が行き交う場。そこを女性が

運営することの意味を伝えたい」



西尾まり

小川俊恵



——脚本を読んだ時の印象を教えてください。

西尾 ノリのいいお話だなと思いました。深刻な問題も出てくるのですが、どれくらいシリアスに描かれるのか、想像がなかったです。俊恵と徹也夫婦の不妊や嫁姑問題に関しても、都会で暮らす私と地方の人たちとは、捉え方が違うんだろうなと思いました。だから映画全体のイメージをつかめたのは実際に牛深に行ってからですね。

——現地に着いてどんな発見がありましたか？

西尾 町の人たちのお話を聞く中で、

◆ Mari Nishio

1974年東京都出身。子役として、TVドラマを中心に人気を博す。その後もTVドラマには欠かせない女優として活動する一方、近年は舞台、映画など幅広く活躍中。近年のTVドラマにNHK「つるかめ助産院～南の島から～」(12)、フジテレビ「結婚しない」(12)、舞台「英国王のスピーチ」(12)など。主な映画出演作に『ケイゾク』(堤幸彦監督／00)『Dolls』、(北野武監督／02)、『椿山課長の七日間』、(河野圭太監督／06)『松ヶ根乱射事件』(山下敦弘監督／06)、『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』(東陽一監督／10)など。

私にとっては個人的に思えることが、牛深では意外とそうでもないということが何度かありました。たとえば養子を迎えるという選択も、割と一般的らしくて「このへんではよくあるよ」と言われたり。私にとっては大変に思える状況でも、カラッと明るく「そんなこと言っていられないでしょ」と笑い飛ばして生きている強さを牛深の人たちに感じました。

——1ヶ月弱の撮影期間中、4歳の息子さんと一緒に、ホテルなどではなく町中の一軒家に滞在されていたそうですね。

西尾 映画の支援者の中に保育園の

「この映画を実現させたのは 決して夢を夢で終わらせない 現実志向の女性の力」

園長先生がいて、撮影中は子供を預かっていただけると聞いて、長男を連れて行くことにしました。生活しながらの長期ロケも初めてなら、東京以外で暮らすのも初めてで、とても新鮮な経験でしたね。

滞在していた家の中には支援者の皆さんが自宅から持ってきてくださった家電や家具が揃っていて、軽自動車も借りられたので毎日自分で現場まで運転できて、何ひとつ不自由なかったです。食事も、買い物や料理をする時間がない時用に東京からレトルトを持って行ったのですが、女子会の方が差し入れてくださって、毎日あたたいごはんを食べることができました。

唯一心配だったのが、知らない土地で息子と離ればなれになることで

す。でも子供の順応は早くて、3日もすると新しい保育園に馴染んでいました。週末は週末で、いろんな人にお世話になって、撮影中に「今、たーくんのおじいちゃんの家に来ます」というスタッフのメールとともに保育園のお友達のおじいちゃんの家で遊んでいる写真が送られてきたこともありました。他にも女子会の方にお風呂に入れてもらったり、ご飯を食べさせてもらったり、私がいなくても元気に過ごしていましたね。「地域で子育て」は本当なんだと実感しました。

——演技についてもお聞きします。女性4人のシーンはいかがでしたか？

西尾 一旦芝居が始まると何をやるでもOKな方たちなので、結構自由にやらせてもらいました。芝居が本

当に流れるというか、何を投げても拾ってくださるんです。今回は長回が多く、ノリで演じられたのがよかったです。反対に言うと、皆さん、嘘が通用しない女優さんたちだから、こちらが少しでも違和感を持つたままだと流れが止まってしまう。

——小川家のシーンは？

西尾 見ての通り、エンケン（遠藤憲一）さんは地元の漁師にしか見えないので、どんなふうに演じようかと考えるまでもなかったです。長山さんも「私、こういう役はあまりやったことないわ」と言いながらも、とても自然にそこに存在していraftしやったので、演じていて楽しかったですね。

カメラマンの方とも話していたのですが、様々なテクニクを駆使して人や物をきれいに見せる映画がある一方で、そこに充満する生活感も埃も含めて、あるがままの人の姿を撮っているのがこの映画なんだろうなと思いました。

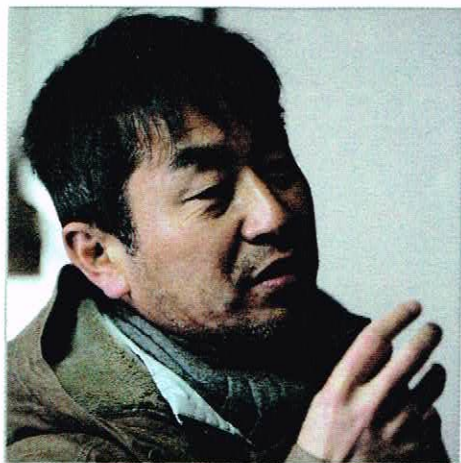
——劇中では女性が町のために立ち

上がりますが、この映画への参加を通して、あらためて女性の力はどういうものだと思いますか？

西尾 この映画自体、町の女性の力なくして実現しなかったと思います。自分たちがこの映画を成功させるんだ、という皆さんのパワーと結束力に押されて、私たち役者も頑張れましたから。このエネルギーは女性の現実志向から来ているのかもしれないですね。女性は常に現実を生きなくて、男性みたいに夢を見ていないというか。夢で終わらせるんじゃないって形にするぞという決意が男性よりも強いのかも。これは万国共通のような気がします。

その上で、牛深の女性は男性を立てるんですね。この映画のために立ち上がってくださった女の人たちにも、いろいろな葛藤があったと思うんです。映画が成功することで女性たちが「やってよかった！」と胸を張って言えて、男性が「次は俺も参加するよ」という流れが生まれたらいいなと思います。





監督・脚本 禰 映

みんなに笑ってもらえる映画を目指しました

——この映画の構想はどのように生まれたのでしょうか？

禰 映画学校の顧問をしていた時に、脚本科の先生の南（えると）さんから生徒が書いた企画書を渡されて、読んで面白かったんです。福田（智穂）さんという上天草出身の女性、地元のスーパで働いた経験をもとに書いたプロットで、パートのおばちゃんたちが店の倒産を防ぐと団結する話でした。僕自身、天草には12年前にドラマの仕事で崎津と牛深と本渡に行ったことがあって、すごく好きだった場所。それで早速、福田さんたちと上天草に取材に行ったのですが、スーパのあった場所が葬儀場になっていて、ここで撮るのは難しいと思い、以前訪れて印象に残っていた牛深に行きました。

牛深の印象は？

禰 絵になる湾、坂道、路地、海岸などが揃っていて、映画のセツミたいな町だと思いました。地元の人には、何でもない普通の風景なのかもしれませんが。で、取材を進めると、人が本当に面白い。特に元気で明るいおばちゃんたちに圧倒され、何度もゲラゲラ笑わせられました。その時聞いたエピソードや台詞を劇中でいくつも使っています。

——女性4人のキャラクターが生まれた背景を教えてください。

禰 弓枝は僕が出会った牛深の女性たちの素敵なところをミックスしたキャラクターです。それに加えて、娘を思う親心という面では、企画の福田さんの両親の存在も念頭にありました。僕らが取材を終えて東京に帰る時に空港へ送ってもらったのですが、別れ際に「監督、よろしくお

願いします」と言われてグッと来たんです。本当は娘に地元に戻ってきてほしいのに、そうやって送り出す親の気持ちに胸を打たれました。

そんな弓枝が頼りにしている相手として生まれたのが姉さんです。まさに人が集まってくるキャラクターということでバーのママ。初期の脚本では昼間は町の子供たちを預かっているという設定も考えていました。一見キツイことをパンパン言うけれど、懐が深い女性ですね。一方で気弱な部分もあり、また本当は寂しいのに元気にふるまっている。

春美に関しては、メインの登場人物のうち1人は外からの視点を持つ人にしたかったので、離婚して子育ても終えて28年ぶりに牛深に戻ってくる女性にしました。物産展の天草コーナーを見て田舎に帰ろうと思っ

企画

福田智穂

天草が衰退していく理由が、交通が不便だからとか、天草には何にもないからとか、言う人が沢山います。自分もそう思っていました。とても栄えていた時代があったのは公然の事実です。そう考えると、時代の流れは勿論ありますが、不便な環境や土地が衰退都市にさせたのではなく、全ては人間の考え方、行動が衰退都市にさせてしまっていると言うことをこの映画で伝えたかった。

天草には「からゆきさん」の歴史があります。

そして、それは海外に出稼ぎに行った『悲しい女性』と表現されている場合が多いです。

私自身、天草で生まれ育ち、女性たちは悲しみながら出稼ぎに行ったのではなく、「生きる為に」行ったのだと感じています。

そして、その人達の中には「私が、家族を幸せにする！」と前向きな気持ちで向かった人もいます。

はです。女性の力強さ、激しい生命力を天草の女性に強く感じ、熊本の女性を「肥後猛婦」と言う理由がよくわかります。

今回、主人公の弓枝が遊郭を使って地域活性化を図った理由は、いやらしい意味ではなく、人間の本能的な活気を取り戻す為の人間覚醒花街復活なのです。ハイヤが遊郭で踊られていた時代は男も女も生命力が強く、本気で闘っていた時代です。そんな時代を再認識するのをまさに本能的に感じやっていたのです。女性の決断力の早さ、負けない根性、根拠のない前向きさ。今の時代に一番必要な女性の強さを表した映画を完成させることができたと思っています。

Chiho Fukuda

1975 年上天草市生まれ。いくつかのアルバイトを経て、スーパーのレジスターとなる。スーパーが葬祭センターになると聞き、おばちゃんたちとスーパー倒産を防ぐためダンスチームを結成、存続を願い魂のダンスを踊るが、あっけなく葬儀場になってしまう。しかし、このことがこの映画の基になる。そして天草ケーブルテレビに入社。高校生の時、興味本意で応募した「天才！たけしの元気が出る TV」のお笑い甲子園にて準優勝する経歴あり。天草ケーブルテレビを退社し東京の映画学校へ入学。そこで、禰監督、脚本家南えるとに出会い、この映画を企画。

原案・脚本

南えると

Elto Minami

静岡市出身。横浜市立大学（現代文学専攻）を卒業後、ソニーミュージック、EMIを経て1993年から渡英、英国サリー大学大学院で児童文学を専攻。雑誌のライターや編集者を経て2002年に帰国。04年にTBSスペシャルドラマで脚本家デビュー。その後、様々な脚本や映画評を執筆する傍ら、専門学校の講師や演劇ユニットを主宰するなど、多彩な活動を展開している。

プロデューサー

小泉朋

Tomo Koizumi

1976 年東京都生まれ。『回路』（黒沢清監督／00）より制作スタッフとして映画業界に入る。黒沢清監督、井筒和幸監督、塩田明彦監督、阪本順治監督を中心に多くの作品に携わり、2010 年 2 月株式会社テトラカンパニーを設立。制作部としての目線から地域映画に着目、岐阜県恵那市市民制作映画『ふるさとがえり』（林弘樹監督／11）の取材をし、困難な資金集めや映画に対する正直な市民の思いなどを中心にドキュメンタリーを制作。CM 制作や 3D コンテンツ、市民参加型映画まで、現場で培ったノウハウを生かして活動中。



女性は太陽だった。



Essay

エッセイ

❖ Tsuyoshi Fukudome

聖徳大学名誉教授・聖徳大学生涯学習研究所 所長、NPO 法人全国生涯学習まちづくり協会理事長。鹿児島県教育委員会、国立社会研究所主任専門職員、文部省社会教育局社会教育官、九州女子大学教授、聖徳大学生涯教育文化学科教授を歴任。現在、現職のほか内閣府地域活性化伝道師、全国生涯学習市町村協議会世話人。千葉県生涯学習審議会会長、千葉県社会教育委員会議長など自治体の役職多数。指導などに関わった自治体は約 1000。まちづくりボランティア制度や「創年運動」「観光まちづくり」を提唱している。

まちを変える女性の力

福留強*

❖ Yuka Kimbara

映画ジャーナリスト。著書に映画における暴力性と少女性について考察した「ブロークンガール」(フィルムアート社)。2012年度は「90年代アメリカ映画100」(芸術新聞社)、「アジア映画の森」(作品社)、「アクターズファイル妻夫木聡」(キネマ旬報)などにも参加、執筆。

金原由佳*

